

事態把握と“了”と“タ”

徐 雨棻

(大阪外国語大学・院)

キーワード：文末の“了”、文末の“タ”、事態の発生、話者の事態把握

§1 本発表の目的

§2 いわゆる「“了”の語気」

§3 未実現事態に用いられる“タ”

§4 事態把握の観点に基づく“了”と“タ”の類似点と相違点

§1 本発表の目的

本発表では、中国語の文末助詞“了”（以下単に“了”と記す）と日本語の文末の助動詞“タ”（以下単に“タ”と記す）を対照させ、「話者の事態把握」¹がどのように言語形式の使用に反映されているのかを考察する。そして、中国語の場合では“了”が「語気助詞」と呼ばれる理由、日本語の場合では“タ”が未実現の事態（見通しと関わる表現）に用いられる理由についての考察を通して、“了”と“タ”は「事態の発生が確実であると話者が捉えたことを表す」と主張することが目的である。

§2 いわゆる「“了”の語気」

2.1 問題提起

中国語の“了”は、「変化（または新しい状況の出現）を表す語気助詞」と説明されることが最も多い。そして、下例のように“了”が用いられると、何らかの語気が読み出されている。

- (1) (電車のライトが遠くに見えて) 啊, 电车来了! (あつ、電車が来た!)
- (2) (友人からのよい知らせを聞いて) 哇, 太好了! (わあ、よかったね。)
- (3) (お客が腰を上げながら) 那, 我走了。(ぼちぼち、おいとまします。)
- (4) (9回表、8対1で阪神にリードされているのを見た巨人ファン) 啊, 输定了。(あー、負けたな。)
- (5) (寝坊した子供を起こすときに) 喂, 起来了! 不要再睡了! (ほら、起きなさい! これ以上寝たらだめよ!)

しかし、近年の指摘を参照しても、“了”が「語気」を有するとは思えない。では、いわゆる“了”の「発見 (例(1))」「感嘆 (例(2))」「決意 (例(3))」「推論 (例(4))」「命令 (例(5))」といったニュアンスは、何に由来しているのだろうか。また、「語気」を有するとは思えない“了”が、なぜ「語気助詞」と名付けられたのだろうか。

¹ 本発表での「話者の事態把握」とは、話者が表現する事態そのものをどのように捉えるかということである。言語表現はそもそも「事態把握」であるが、重要なことは「話すときに『話者の事態把握』が顕在化させているか否か」に留意すべきである。

2.2 先行研究とその問題点

従来の研究では、“了”の使用により読み出された語気に関して簡単な記述だけに留まることが多いものの²、王力(1943,1944)はその内実について最も詳細に記述している。

王力は、“決定語気”(決定の語気)が“了”で表現されるとし、その意味を「ある状況が既に実現を見ていることを認定するものである」と指摘した。それが「状況に応じて感慨、愛惜、喜び、羨望、熱望、脅迫などのニュアンスを帯びる」とも述べている。また、「断定の語気」をもち、「気づき、決意、判断を陳述する」ことも言及している³。しかし、王力の説明においては、どのような状況において“決定語気”(決定の語気)が感慨、愛惜、喜び、羨望、熱望、脅迫などのニュアンスを帯びるかについて十分に明らかにしているとは言い難い。すなわち、「ある状況が既に実現を見ていることを認定するものである」ことがどのような過程を経て上記のニュアンスを生成しているのか明らかでない。以下では、“了”の使用条件を定義し、いわゆる「“了”の語気」の由来を明らかにする。

2.3 事態把握の観点に基づく“了”

前述のように、“了”の使用条件として「変化(または新しい状況の出現)」がよく規定される。この「変化」とは「ある状態が終了すると同時に、もう一つの状態が始まること」を意味している。つまり、「新しい状況の出現」と同義である。ここでは、両概念の長所を保持するため、「事態の発生」という記述を選択する。また、従来の研究は、いずれも「事態とアスペクト上の関係」、つまり“了”という形式がどのようなアスペクトの機能を担うかという観点からのみ論じられており⁴、「話者がそのアスペクト上の状態をどのように認定するか」については言及されていない。これに対し、本発表では、“了”の使用を一層明確に把握するには「話者が事態そのものをどう捉えるか」という要因を付加することが必要になると考え、“了”の使用条件を「話者の事態把握」と関連させ、論を進めることにする。

■ 事態把握の観点に基づく“了”の使用条件：事態の発生が確実であると話者が捉えること。

事態の発生がいつ起こるとしても、その発生が確実であると話者が捉えれば、“了”の付加は可能である。すなわち、ある事態の発生が現実世界に存在した、存在している、存在しうると話者が感じ取れば、たとえ「事態が発生する時点」と「事態の発生が確実であると捉えた時点＝〈発話時現在〉」に時間的ずれがあっても“了”を用いることができるのである。以下では、实例に即しながら前述の主張の妥当性を確かめる。

まず、「事態が発生する時点」と「事態の発生が確実であると捉えた時点」とが時間的に一致している場合——つまり「事態の発生が〈発話時現在〉に起こっている場合」の用例を挙げる。

² 呂叔湘(1942)、刘月华(2001)、楊凱榮(2001)等参照。

³ “決定語気是用極堅決の語気，陳說一種覺察，決意或判斷。”(王力 1943)、“決定語気系用“了”字表示。它的用途在于是認某一境況已成定局，同时又往往跟着境況之不同，而帶有感慨、惋惜、欣幸、羨慕、熱望、威吓等類的情緒。”(王力 1944)

⁴ “了”という形式がアスペクトの機能を担う形式であるとして位置づける研究は、Li & Thompson(1981)の“Currently Relevant State”、張黎(2003)の“界變”、沈力(2003,2006)の“選擇[+出現]事象，表示實現”、木村(2006)の“變化”等参照。“了”の使用により読み出された語気に対する解釈や“了”のムード的な機能の考察は、本発表での定義の方が優れている。

- (6) (屋外で歩いている際に、急に雨がポツポツ落ちてきたことに気づいた状況) 嘿，下雨了！(あつ、雨だ。)
- (7) (黒い雨雲が空を覆うのを見て、雨が降りそうだった状況) 快下雨了⁵。(雨が降りそうだ。)

次に、「事態が発生する時点」と「事態の発生が確実であると捉えた時点」とに時間的なずれがある場合の用例を挙げる。

- (8) (家を出る際には雨が止んでいたが、濡れた地面に気づいた状況) 下雨了。(雨が降ったんだ。)
- (9) (窓を開けて雨が降っていることにふと気づいた状況) 下雨了。(雨が降っている。)

(8)(9)では、実際の降雨の時点が〈発話時以前〉である。また〈発話時現在〉において、(8)は「雨がすでに止んでいる」、(9)は「雨が降っている」という状況である。両方とも、話者がなぜか実際の事態のアスペクトの局面(例(8)オワル形、例(9)テイル形)を無視して、“了”を用いて表現している。それは、『話者が気づいていない』状態から『気づいた』ことに表現の力点が置かれているからではないだろうか。このことから、“了”が「気づき」という変化を表すムード的な機能を担っていることが伺える⁶。

- (10)他喜欢用一双手把我举到半空中，吓唬我：“摔下来了！摔下来了！”我一点也不怕：“你敢！你敢！”他不敢。我又吓唬他：“我跳下去啦！我跳下去啦⁷！”(戴厚英《人啊，人》
お父さんは、よく私を両手で宙に抱き上げ、「落ちるぞ！落ちるぞ！」と脅かした。私は、「やれるなら、やってみなよ！やってみなよ！」と言って、少しも怖がらなかった。そして今度は私が「飛び降りるよ！飛び降りるよ」と言って、お父さんを脅した。(訳文は発表者による)

- (11)佟湘玉：嘿，你这个店，我买了！(北京大学汉语语言学研究中心语料库)
佟湘玉は「うん、お前の店、俺が買う！」と言った。(訳文は発表者による)

- (12)他站起身来说：“我们的大队此刻就要出发了。请您马上向贵司令报告，要他命令军警不要阻挡。”……“好吧，我代你们向司令去讲。”参谋长见他们写上了名字立刻走了进去。阴暗

⁵ 本発表では、杉村(2006)が指摘した IC 分析(つまり、[(快……)了])を取り入れ分析する。前述した“了”の使用条件によると、“(快……)”という状況が出現していると話者が認定すれば、“了”が用いられると考えられる。この場合は「もうすぐ雨が降る」という事態が確実であると捉えられている。

⁶ 上記の(9)のような場合において、木村(2006)は、発見の場面では、未降雨から降雨への〈変化〉の局面に立ち返ったため、“了”が用いられていると述べている。本発表では、以下の例から、この説明は妥当でないと思われる。

- (沖縄は6月になって、梅雨に入る。そして、約1ヶ月の間、ほぼ毎日雨が降っている状態である。6月の下旬頃、大阪から遊びに行った観光客が飛行機から降りてきたとき、雨が降っているのに気づいて) 呦，下雨了。(あつ、雨だ。)

この場合の“了”の使用は、果たして梅雨が始まった頃に遡り、“没下雨”(雨が降っていない)から“下雨”(雨が降っている)への事態の変化を意味しているのだろうか。おそらくこのような解釈は妥当ではないと思われる。この“了”は、外の事態の変化でなく、「話者の気づいた変化」を意味していると考えられる。気づきの背景には、必ずしも事態の変化が含まれるとは限らない。事態そのものに変化がなく、単に私が知らないだけで「気づいた」という可能性も十分ある。

⁷ “啦”(la)は[“了”(le) + “啊”(a)]の音便である。

的大房间里剩下了卢嘉川和许宁两个人。他们俩互相望望，都笑着叹了一口气。“出发了！”许宁用力捏住卢嘉川的手，他漂亮的大眼睛像有火在燃烧。“出发了！”卢嘉川点点头。（杨沫《青春之歌》）

彼は立ち上がって「僕達の大隊は、もうすぐ出発します。すぐ司令に報告して、軍警が妨害しないように、命令していただきたいのです」と言った。……「よろしい、そう司令に話そう」参謀長は彼らの名前を書き上げるのを見届けてから、すぐさま出ていった。うす暗い応接室には、芦嘉川と許寧のふたりだけが残された。二人は互いに顔を見あわせて、笑いながら溜息をついた。「出発だ！」許寧は力いっぱい芦嘉川の手を握った。彼の美しい大きな瞳は、火のように燃えていた。「出発だ！」芦嘉川もうなずいた。（訳文は発表者による）

(10)－(12)においては、いずれも事態の発生が〈発話時以後〉である。つまり、“了”が「未然の事態（＝〈発話時現在〉において未だ実現していない事態）」に対し用いられている場合である。これらの例文では、事態はまだ発生していないと話者が認識しながらも、“了”を用いることによっていかにも発生したかのように表現されている。

このように、「事態の発生が確実であると捉えた時点＝〈発話時現在〉」と「事態が発生する時点」とに時間的なずれがあるとしても、もしその発生が真であると話者が思えば、“了”を付加して発話することができるのである。以下では、「事態の発生が確実であると話者が捉えたこと」を基に、いわゆる「了」の語気」の由来を検討していく。

2.4 いわゆる「了」の語気」の由来

“了”が表す語気には、主に「断定の語気」「発見の語気」「感嘆の語気」「決意の語気」「推論の語気」「命令の語気」があるとされている（王力 1943,1944、刘月华ほか 2001、楊凱榮 2001）⁸。

2.4.1 「断定の語気」の場合

(13) 正说着，又听到西边一阵脚步声。玉梅说：“来了来了！这一回来的人可不少！”（赵树理《三里湾》）

話をしていると、また西の方から足音が聞こえてきた。玉梅は言った。「来た、来た！今回は沢山の人がやって来たわよ」（訳文は発表者による）

(14) 王文义伸手摸耳朵，摸到一手血，一阵尖叫后，他就瘫了：“司令，我挂彩啦！我挂彩啦，我挂彩啦。”（莫言《红高粱》）

王文義は耳を触ってみて、手が血だらけになると、悲鳴をあげてへたりこんでしまった。「司令、やられた！俺、やられちゃったよ」（中日対訳コーパス《赤い高粱（訳文）》）

「話者が事態そのものをどう認定するか」、即ち「話者の事態把握」という概念には、（事態の発生に対する話者の）確信に満ちた判断が含意されている。そのため、「断定の語気」を生むことになる。

⁸ 刘月华ほか(2001:384)は、“了”の語気を“肯定语气”(断定の語気)とし、それに文終止の機能があると述べている。また楊凱榮(2001:88-90)では、“了”のモダリティ用法には「命令」「断定の強調」「感嘆」「依頼的禁止」などがあることにふれるにとどまり、さらなる詳細な説明はない。

2.4.2 「発見の語気」の場合

(15) (人が溺れているのを発見して) 呀, 有人溺水了, 快抢救呀! (あっ、誰かが溺れている。早く助けて!)

(16) 谭静放学了, 哼着歌一蹦一跳地跑回家, 来到楼门口, 正要上台阶, 冷不防从门里闪电般蹿出一个人, 冲着她的耳朵清脆地大叫了一声: “嗨!” 这突如其来的叫声把她吓了一跳, 定神一看, 眼前倏地一亮, 禁不住高兴地大叫起来: “嘿, 晓梦, 你回来了!” (张海迪《轮椅上的梦》)

放課後、鼻歌をうたいスキップしながらもどった譚静がアパートの入り口に駆けこむと、誰かが耳元でワッと叫んだ。譚静は飛び上がったが、相手の顔を見るなりうれしそうに声を上げた。「あらっ、晓梦、帰つてたの!」(中日対訳コーパス《車椅子の上の夢(訳文)》)

“有人溺水了”や“你回来了”の IC 構造を“[(有人溺水)了]”や“[(你回来)了]”と分析する。この場合、「人が溺れる」や「相手が帰ってくる」という事態が現実となって話者の認知環境に投げ込まれ、「事態の発生が確実である」と話者が捉えたため、“了”が用いられている。そして、事態の確実な発生を話者が認定する際に、それと同時に話者自身のデフォルト知識も更新されるため、「何かに気づいた」というような(事態の発生に対する)発見と呼ぶに相応しいニュアンスが生じるのである。

2.4.3 「感嘆の語気」の場合

(17) “这个主意太棒了!” (张海迪《轮椅上的梦》)

「とってもいい思いつきだね」(中日対訳コーパス《車椅子の上の夢(訳文)》)

(18) 为几斤杂面条当一个茶盒, 太不值了。(王蒙《活动变人形》)

僅かばかりの雑穀の麺を買うのに茶筒を質草にするとはもったいない。(訳文は発表者による)

この二例においては、“太棒了”や“太不值了”の IC 構造を“[(太棒)了]”や“[(太不值)了]”と分析することができる⁹。そして、“了”の使用は、“太棒”(極めてよい)や“太不值”(極めてもったいない)と相応しい状況が現実に出現し、その出現を話者が確実であると捉えているため行われている。この場合、「感嘆の語気」は、“太”(極めて)という副詞成分と「話者の認定」によって引き出されたものと考えられる。つまり、その「極めて……」ということを話者が思えば、「感嘆」のニュアンスが生じるのである¹⁰。

2.4.4 「推論の語気」「決意の語気」「命令の語気」の場合

以下では、まず「推論(例(19)(20))」や「決意(例(21)(22))」、「命令(例(23)(24)(25))」というような「未然の事態」に対し“了”が用いられる理由から議論する。

⁹ 杉村(2006)の指摘による。

¹⁰ “好极了!”(極めて良い)や“热死了!”(死ぬほど暑い)、“坏透了!”(極めて悪い)のような発話も「感嘆の語気」を有するとされる。これらの IC 構造は、“(好)极了”や“(热)死了”、“(坏)透了”であり、この場合の「感嘆の語気」は、“……极了”や“……死了”、“……透了”という程度補語によると考える。

(19) (旅行中、庭に水を撒くのを忘れたことを思い出して) 呀，糟了，这下院子的花全枯死了。(あつ、しまった。これで庭の花はもう枯れたな。)

(20) 满喜走过去一把揪住她说：“咱们找个地方去说！我就非要你说清楚不可！”满喜一揪她，她便趁势躺倒喊叫：“打死人了！救命呀！”（赵树理《三里湾》）

满喜は歩いて行って彼女をつかんで言った。「ほかの場所で話をしよう！どうしてもあなたとはつきりさせたいのです」满喜が彼女をつかんだ拍子に、彼女は勢い余って倒れてしまい叫んだ：「人殺し！助けてー」（訳文は発表者による）

(19)(20)においては、“花全枯死了”や“打死人了”の構造を“[(花全枯死)了]”や“[(打死人)了]”にIC分析することができる。そして、「花がすべて枯れること」や「叩いて殺されること」が必ず出現するものと話者が捉えたため、“了”が用いられていると考えられる。

(21) “妈，我到同学家里去了！”（戴厚英《人啊，人》）

「お母さん、あたし、お友だちの家に行くってくる」（中日対訳コーパス《ああ、人間よ（訳文）》）

(22) 胡灵：……马上就要过年了，唱一个《新年快乐》（笑）这时候唱这首歌是最合适的，祝大家新年好，然后祝大家新年快乐，我唱喽¹¹！ 主持人：唱吧。

<http://ent.sina.com.cn/v/m/2007-01-16/ba1412354.shtml>

胡灵：……もうすぐ新年だし、《新年快乐》（笑）を歌います。この時にこの歌を歌うのが一番相応しいです。素晴らしい年になりますように。それから皆さんにとって、よき一年でありますように。歌いますよ！ 司会者：どうぞ。（訳文は発表者による）

(21)(22)のIC構造は“[(我到同学家里去)了]”や“[(我唱)喽]”のように分析することができる。そして、“了”が用いられているのは「友人の家に行くってくること」や「歌うこと」が必ず発生するものと話者が判断しているからであると解釈できる。

(23) “森森，起床了！”蒋卓君边叫边拉开窗帘，……。（王周生《陪读夫人》）

「森森、起きなさい」蒋卓君は叫びながらカーテンを開いた。……。（訳文は発表者による）

(24) “过去的呀，都让它滚蛋吧，我从今个从头来，谁也不要提它啦！”（浩然《金光大道》）

「過ぎたことはもういいや。一からやり直すんだ、古傷には触らないでくれ」（訳文は発表者による）

(25) “别逗了。你们不理解，这是自然而然的。”（史铁生《插队的故事》）

「からかわないで。あなたがたにはわからないでしょうけど、ごく自然にそうなったの」（中日対訳コーパス《遙かなる大地（訳文）》）

(23)は肯定的な命令を示し、(24)(25)は“不要”や“别”（……するな）を用いていることから否定的な命令を示す。これらの場合も、“[(起床)了]”や“[(不要提它)啦]”、“[(别逗)了]”とIC分析できる。そして、“了”の使用は、相手が「起きる」や「過去のことを言うのをやめる」、「からかうのをやめる」という事態が確実に起きると話者が一方的に捉えているからであると解釈できる。

¹¹ “喽” (lou) は“了” (le) + “呕” (ou) の音便である。

(19)－(25)の共通点は“了”が「未然の事態」に用いられていることである。しかしながら、それぞれ「推論(例(19)(20))」や「決意(例(21)(22))」、「命令(例(23)(24)(25))」というように語気が異なっている。このような差異は、何に起因しているのだろうか。

本発表では、「推論」「決意」「命令」といった語気は「事態の発生が確実であると捉える時点＝〈発話時現在〉」と「事態が発生する時点＝〈発話時以後〉」との時間的ずれにより生じるが、どの語気が導き出されるかは“了”自体とは関連していないと考えている。ここでは、これらの語気の差異を導く要件は「動詞にかかる制約」と「主語の人称」と考えた。「動詞＋結果補語」の場合は、「推論の語気」を生じる。また、動詞に意志性がある場合については、二つに分かれ、主語が一人称である場合は「決意の語気」を、二人称である場合は「命令の語気」を生じる。

■ 「推論」「決意」「命令」といった語気の相違の由来

- a. 「動詞＋結果補語」の場合：「推論の語気」
- b. 意志動詞の場合
 - ① 主語は一人称の場合：「決意の語気」
 - ② 主語は二人称の場合：「命令の語気」

2.5 まとめ

以上、“了”は「事態の発生が確実であると話者が捉えたことを表す」と主張した¹²。そして、その性質を“了”に賦与することによって、“了”が「語気助詞」と呼ばれる理由が説明できる。つまり、「話者の事態把握」が、いわゆる「“了”の語気」と関連すると結論づけた。

§3 未実現事態に用いられる“タ”

3.1 問題提起

周知のように、日本語の“タ”は、「事態または事態の情報の成立時点が〈発話時以前〉であることを示す」というように、「過去」というテンス的な意味として説明されることが最も多い¹³。ところが、実際に使われている日本語を観察していると、上記のようなテンス的な観点では十分に説明できない言語事実时不时に遭遇する。

(26) (試合時間が残り僅かな状況で、ブラジルが4点目のゴールを入れたのを見て) ああ、これで日本はもう負けたな。

(27) (毒を飲ませて、相手の苦しんでいる姿を見て) これでお前は、もう死んだな。

(28) (電車が人身事故を起こし、車内の会社員たちが) これですべてに遅れたな。

上記の(26)では、試合はまだ終わっていないが、「ブラジルが4点目のゴールをいれた」という状況

¹² 本発表では、“了”の規定において従来の「アスペクトの観点に関わる条件(＝事態の発生)」と本発表の主張である「事態把握の観点に関わる条件(＝事態の発生が確実であると話者が捉えた)」を複合的に考える。中心的な現象では、どちらの観点でも解釈できる。しかし、例文(8)と(9)のような周縁的な現象においては、「事態把握の観点に関わる条件」だけ解釈可能である。そのため、「アスペクトの観点に関わる条件」と「事態把握の観点に関わる条件」とはきれいに切り離せないが、また完全に表裏一体の関係にあるのでもない。

¹³ 金水(1998)、井上(2001)、定延(2001)等参照。

を見て、「日本が負ける」ということを推測している。(27)では、話者は相手に毒を飲ませたことを実現したとき、相手の苦しむ姿を見ながら「お前がまもなく死ぬ」ということを推測している。(28)では、電車の人身事故から「会社に遅れる」ということが推測されている。そして、それらの推測結果が“タ”形で発話されている。

上例のように、「日本が負ける」や「相手が死ぬ」、「会社に遅れる」という事態は〈発話時以後〉に発生するもので、「過去」とは言えない。それにも関わらず、“タ”形の使用が許容されている。なぜこのように未実現の事態¹⁴を“タ”形で表現することができるのだろうか。本発表では、考察の便宜上、この種の“タ”形表現を「見通しと関わる“タ”形表現」と呼ぶ。以下、「動詞の性質にかかる制約」や「“ル”形との表現上の相違」を考慮に入れながら議論を進める。そして、それらを明らかにすることで、“タ”形が未実現の事態に用いられる条件を明らかにする。また、その分析を通し、文末の“タ”の使用条件に対して新しい視点を提案したい¹⁵。

3.2 先行研究とその問題点

「見通しと関わる“タ”形表現」については、すでに「先回り宣言の“タ”」（国広 1967）および「見通しの獲得の“タ”」（尾上 1982）という代表的な説がある。

(29) [相撲などを見ていて、まだはっきり勝負が決まらないうちの発言] 負けた! / 勝った! (国広 1967:67)

(30) [バス、電車などが遠くに姿を現わただけで、まだ目前に到着していない時の発言] 来た、来た¹⁶! (同上)

国広(1967:67-73)は、曖昧な「過去形」「完了形」という言葉を廃し、「実現形」という言葉を用いて“タ”の意義素を「客観的にある事柄がある時点において実現した状態にあることという不定人称者の判定を表す」としている。そして、(29)(30)の“タ”形を「実際にはまだ実現していない動作・状態を確実に実現するものとみて先回りして実現した(も同然)と宣言・承認する」という意味・用法と捉え、「先回り宣言」と名付けている。

¹⁴ 本発表では、「未然の事態 (= 〈発話時現在〉において未だ実現していない事態)」を「未実現の事態」と呼ぶ。論理的に考えれば、「未実現の事態」と「実現済みの事態」との区別は次のようになる。

■ 「未実現の事態」は「未定の事態」である。従って、事態はキャンセル可能である。

■ 「実現済みの事態」は「既定の事態」である。従って、事態はキャンセル不可能である。

¹⁵ 本発表は、“タ”の生成条件を考える際、文末の“タ”と文中の“タ”を分けて考える。なぜなら、形式の多義性は避けられず、文法位置(どのような文法環境に使われるか)によって、機能が変わってくるためである。「“…タ”」というように文末の“タ”で発話することで様々なムード的な意味が生じるが、文中の“タ”で発話してもムード的な意味は生じない。そのため、両者は分けて考えたほうがよいだろう。

¹⁶ 本発表では、「来た」という発話は未実現事態に用いられる“タ”形として位置づけることができないと考える。「来る」という動詞には二つの動きの焦点があり、一つは「出発点から現れる」こと、もう一つは「到着点につく」ことである。(30)の場合、前者の解釈では実現済みの事態に対する発話状況と捉えることができ、一方、後者の解釈では未実現の事態に対する発話状況と捉えることができる。しかし、(30)の発話では前者の解釈がありうるため、この発話は未実現の事態に用いられる“タ”形とは言い切れない。

(31) (殺人計画の完成) これで間違いなくあいつは死んだ! (尾上 1982:22)

(32) (詰みにつながる手筋を発見して三1角を打ちながら) よし、これで勝った! (同上)

尾上(1982)では、上記の(31)(32)の“タ”を「見通しの獲得」と名付け〔確言〕という分類の中としてまとめ、〔確言〕の内実は「その事態を今確かに手に入れた」という気分を持つとしている (p.24)。また、「見通しの獲得」の“タ”は、完了という意味につきまとう確認の気分が独り歩きしたものであり、完了という意味は喪失していると述べ、それは「発話一般が様々にもつ主観的姿勢としてのモダリティーに関わると言うのが妥当 (p.24)」だとしている。

以上の説明では、この種の“タ”形の使用には「話者の主観的姿勢」が重要な要素として関係してくることが示されている。これらの指摘は「見通しと関わる“タ”形表現」を分析するのに際し念頭におくべき論点であると評価できるが、話者の主観的姿勢とは何かについては具体的に言及されていない。また、“タ”形が用いられるための制約は何か、そして次の例に示すように“ル”形との表現上の相違は何か、などの問題について直接的な説明がなされていないように思われる。

(33) (将棋で詰みにつながる手筋を発見して三1角を打ちながら)

a. よし、これで勝った!

b. よし、これで勝つ!

3.3 考察

以下、先行研究が言及していない「動詞の性質にかかる制約」や「“ル”形との表現上の相違」から論を進めていく。

3.3.1 動詞の性質にかかる制約

従来の研究では、「見通しと関わる“タ”形表現」に用いられる動詞に関してははっきりとした範疇が示されていない。本発表では、『日本語基本動詞用法辞典』から 728 の動詞を抽出し、「見通しと関わる“タ”形」会話例を作成した (添付資料参照)。その結果、「見通しと関わる“タ”形表現」に用いられる動詞が **telic** な動詞 (限界動詞)¹⁷、つまり「主体変化動詞」と「主体動作・客体 (対象) 変化動詞」に偏っていることがわかった¹⁸。そして、以下の例に示すように、見通しの状況であっても **atelic** な動詞 (非限界動詞)、即ち「主体動作動詞」を用いた場合、“タ”形で発話できないこともわかった。

(34) (これから走る彼女について) *これでもう走ったな。

¹⁷ 金水(2000:31)によれば、動詞の時間的構造から見ると、終了限界が意味的に内在されているか否かという観点から「**telic** な動詞」と「**atelic** な動詞」に二分類することができる。**telic** な動詞は「終了限界が動詞の意味に含まれており、その終了限界を超えなければ、運動が達成されたとは見なされない。たとえば、「木が倒れる」にしても「木を倒す」にしても、木が倒れた状態になってはじめて運動が達成されたとは見なされるのである」。これに対し、「走る」「食べる」などの **atelic** な動詞は、「どのような状態に達すれば運動が達成されたか」という基準があらかじめ決まっているわけではない。

¹⁸ 添付資料の動詞が **telic** な動詞であるか否かを判定するための基準は連語論的に決定される。例えば、

a. 血が流れる。 ⇒ この場合の「流れる」は **atelic** な動詞である。

b. 試合が流れる。 ⇒ この場合の「流れる」は「無くなる」という意味で、**telic** な動詞である。

(35) (目の前にあるチョコレートに手をのぼしている彼女を見て) *これでもう食べたな。

「見通しと関わる“タ”形表現」に telic な動詞が用いられやすく、逆に atelic な動詞が用いられにくくなるのは何故だろうか。それは“タ”と共起した際に「結果状態 (= 変化後の状態)」が動詞の語彙的な意味として読み込まれるか否かに関係しているのではないだろうか。

見通しとはある事態の結果に対する予測であり、「結果」を連想させやすい動詞が「見通しと関わる表現」に適していることは容易に推察される。“タ”と共起した際に「その動作がどこまで続くか」が動詞から読み取れるかどうかは、「結果状態 (= 変化後の状態)」を予想できるか否かと密接に関係しており、「結果状態 (= 変化後の状態)」を語彙化する telic な動詞 (特に、主体変化動詞) は「見通しと関わる“タ”形表現」との表現的相性がよいと考えられる。

3.3.2 “ル”形との表現上の相違

両形式の表現上のニュアンスの相違について、母語話者に調査したところ、「見通しと関わる表現」において“タ”形で発話される場合では「事態が実現したも同然だと判断した表現」というニュアンスであり、“ル”形で発話される場合では「事態が実現すると予測した表現」というニュアンスであることがわかった。

(36) (試合時間が残り僅かな状況で、ブラジルが4点目のゴールを入れたのを見て)

- a. これではもう負けたな。
- b. これではもう負けるな。

(37) (毒を飲ませて、相手の苦しんでいる姿を見て)

- a. これでお前は、もう死んだな。
- b. これでお前は、もう死ぬな。

(36)a の“タ”形表現は「もう負けが決まったも同然だと判断した表現」であり、b の“ル”形表現は「負けると予測した表現」である。(37)a の“タ”形表現は「もう死んでも同然だと判断した表現」であり、b の“ル”形表現は「死ぬと予測した表現」である。

この違いは、実現可能性があまり無いことを示す副詞「ひよっとしたら」「もしかしたら」を加えてみると一層明確になる。

(38) (試合時間が残り僅かな状況で、ブラジルが4点目のゴールを入れたのを見て)

- * a. ひよっとしたら日本はもう負けたな。
- b. ひよっとしたら日本はもう負けるな。

(39) (毒を飲ませて、相手の苦しんでいる姿を見て)

- * a. もしかしたらお前は、もう死んだな。
- b. もしかしたらお前は、もう死ぬな。

(38a) (39a) が非文である理由は、推測した事態をすでに確定していると捉えて“タ”形を用いたにもかかわらず、実現可能性が低いことを示す副詞を付加し、「確定した事態」を「不確定な事態」のように表現したことにより、表現上の不適合が生じているからだと考えられる。一方、(38b) (39b) は、話者が

〈発話時以後〉に生じる事態を予測した表現であり、事態の確定性の度合を示す修飾成分を付加しても、表現上の不適合は生じない。

以上のことから、「見通しと関わる“タ”形表現」は、未実現の事態をあたかも既に実現した確定的な事態であるかのように表現したものであり、「事態の実現に対する強い確信」というニュアンスを有することが明らかになった。これに対し、そのまま未実現事態の見込みとして表現される“ル”形表現は、“タ”形表現と比較し、事態の実現に対する確信度が低いといえる。

以上のことをまとめると、次のようになる。

■ 両形式の表現上の相違

“タ”形表現：事態が実現確定的なものとして表現される。

“ル”形表現：事態が実現可能なものとして表現される。

3.3.3 “タ”の役割

前述のように、「見通しと関わる“タ”形表現」は「事態の実現に対する強い確信」、即ち事態の実現を確実なものとして話者が捉えたというニュアンスを有し、その表現に用いられる動詞は *telic* な動詞に偏っていた。この種の動詞は「“……タ”という状態になってはじめて運動が達成され、そこから、結果状態（＝変化後の状態）が出現したと見なされる」ものと考えられる。

このことを踏まえると、「見通しと関わる“タ”形表現」は「事態の実現を確実なものとして話者が捉えた」という表現効果を有することから逆算して、“タ”の使用条件は「[“……”という状態になった]と話者が捉えたこと」と推察される¹⁹。

(40) (試合時間が残り僅かな状況で、ブラジルが4点目のゴールを入れたのを見て) ああ、これで日本はもう負けたな。(=(26))

(41) (毒を飲ませて、相手の苦しんでいる姿を見て) これでお前は、もう死んだな。(=(27))

(42) (電車が人身事故を起こし、車内の会社員たちが) これですべて遅れたな。(=(28))

たとえば、3.1節で取り上げた「これで日本はもう負けたな」や「これでお前は、もう死んだな」、「これで完全に遅れたな」においては、話者が「[“日本が負ける”ということになった]」や「[“お前が死ぬ”ということになった]」、「[“会社に遅れる”ということになった]」と思ひ込み発話している。つまり、話者がその事態の発生を自分の認知レベルで確実に起こったものと判断すれば、“タ”形を用いて発話できるのである。

また、「[“……”という状態になった]と話者が捉えたことを表す」という意味が“タ”に賦与されていることから、このタイプの“タ”形表現が「これで(もう)……タ(な)」というような定型句と結びつく理由も説明できる。そして、「これで(もう)……タ(な)」の「これで(=この状況で)」が、「[“……”という状態になった]」という「話者の認知レベルで変化が起きた」きっかけとなる“スイッチ”で

¹⁹ 前述のように、国広(1967)が、この種の“タ”形表現を「実際にはまだ実現していない動作・状態を確実に実現するものとみて先回りして実現した(も同然)と宣言・承認する」と規定している。本発表では、“タ”をあくまで「[“……”という状態になった]と話者が捉えたこと」と述べるのみであり、それが *telic* な動詞と共起すると国広が指摘する意味となる。

あるとも考えられる。この点は、事態実現の見通しが確定的でない限り、“タ”形の使用が不可であることから明確である²⁰。

この種の“タ”形表現が「事態の実現に対する強い確信」というニュアンスを有するのは、telic な動詞と上述の“タ”の使用条件が連携して「動きの終了」という意味を導き出し、そこから「結果状態（＝変化後の状態）の出現」と話者が捉えていることに起因していると考えられる²¹。

以上の点から、「見通しと関わる“タ”形表現」は、「話者の事態把握」という認知的側面を顕在化させているといえる。

3.4 まとめ

前述のように、「動詞の性質にかかる制約」や「“ル”形との表現上の相違」から、“タ”形が用いられる条件を導き出した。そして、その条件が「[“……”という状態になった]と話者が捉えたこと」であると主張した。また、“タ”形の実現確定的なニュアンスの由来については、その条件と telic な動詞に起因している。この種の“タ”形表現は「話者の事態把握」という認知的側面を顕在化させていると結論づけた。

未実現の事態に対する“タ”形表現からわかるように、文末の“タ”の使用条件についてテンス的な観点のみから論じることは不十分であるといえる。そこで、本発表では、文末の“タ”の規定において「テンスの観点に関わる条件」と「事態把握の観点に関わる条件」を複合的に考えることを主張し、次のように補足説明した²²。

■ 文末の“タ”の使用条件

- a. テンスの観点に関わる条件：事態または事態の情報の成立時点が過去にあったこと。
- b. 事態把握の観点に関わる条件：事態の発生が確実であると話者が捉えたこと。

²⁰ 発話状況の設定によって自然度が変わる。

■ 状況 1-1：（引き逃げをした車のナンバーが判明した。また、商店街に設置された監視カメラで犯人の顔も記録されている。そこで、捜査中の警官が）??よし、これで（犯人を）捕まえたぞ。

状況 1-2：（指名手配犯の潜伏先を突き止め、周囲を取り囲んだ警官が）よし、これで（犯人を）捕まえたぞ。

■ 状況 2-1：（野球の試合で 4 回表にホームランが出て 1 点リードしたチームの監督が）??よし、これでこの試合は頂いたぞ。

状況 2-2：（野球の試合で 9 回表にホームランが出て 5 点リードしたチームの監督が）よし、これでこの試合は頂いたぞ。

²¹ もし atelic な動詞で「見通しと関わる“タ”形表現」を行おうとした場合、その動詞は「結果状態（＝変化後の状態）」という意味をもっておらず、本発表で主張している“タ”の使用条件「[“……”という状態になった]と話者が捉えたこと」を与えても、「結果」を予想できないことから、その発話は非文となるのであろう。

²² 本発表では、文末の“タ”が用いられる条件は「テンスの観点に関わる条件」と「事態把握の観点に関わる条件」という二つの観点から考える。そして、両者の関係はそれぞれ独立したものではないと考えている。つまり、テンスの観点と言われるものの典型例の中に、事態把握の観点の使用条件が既に含まれているのである。例えば「花が咲いた」という発話では、両方の観点からの解釈が可能であると思われる。しかし、ここで取り上げた現象においては、「事態把握の観点に関わる条件」だけが解釈可能である。そのため、おそらく「テンスの観点に関わる条件」は「事態把握の観点に関わる条件」由来のものであろう。そして、この主張は三上(1953)の指摘「テンスがムウドの出身であるという素性は容易に消えてしまうものではない(p.225)」と相通じている。

(a)は、「“タ”は事態と関連付けられる何らかの時点が〈発話時以前〉であることを表す」という従来の説と同義である。一方、(b)は、文法的知識と異なったレベルで、事態把握の観点に基づいて“タ”の使用を規定する。その条件とは、「[“……”という状態になった]と話者が捉えたこと」である。「[“……”という状態になった]」は「事態の発生」と表記する。そして、事態把握の観点に関わる“タ”の使用条件とは「事態の発生が確実であると話者が捉えたこと」である。

以上のように、従来「テンス」の観点から知られていた“タ”の使用条件に、さらに「事態の発生が確実であると話者が捉えたことを表す」という「事態把握」の観点に基づく使用条件を加えることによって、文末の“タ”を一層明確な形で把握できる。また、この提案により、従来曖昧なままで言われてきた「話者の主観的姿勢」も明らかにできると期待される。

§4 事態把握の観点に基づく“了”と“タ”の類似点と相違点

以上、事態把握の観点から、文末の“了”と文末の“タ”について考察してきた。両者の類似点は二つある。一つは、“了”と“タ”の使用条件が、「事態の発生が確実であると話者が捉えたこと」にあること。もう一つは、“了”が用いられる「見通しと関わる表現(=推論の状況)」や“タ”が用いられる「見通しと関わる表現」においては動詞の限界性が要求されていること。異なるのは、日本語の場合は telic な動詞、中国語の場合は結果補語を伴った動補構造という表現形式が使用されていると結論付けた²³。

【主要参考文献】

- 刘勋宁 2002 「现代汉语句尾“了”的语法意义及其解说」,『世界汉语教学』第3期
- 刘月华等 2001 《实用现代汉语语法》,商务印书馆。
- 吕叔湘 1942 《中国语法要略》,商务印书馆。
- 杉村博文 2006 句尾助词“了”的语义扩张及其使用条件,《汉语教学学刊》第二辑,北京大学对外汉语教育学院。
- 沈 力 2003 汉语的直称语态范畴,《语法研究和探索(十二)》,商务印书馆。
- 2006 汉语的基本事象与体貌标记,『现代中国語研究』第八期,朋友書店。
- 王 力 1943 《中国现代语法》,商务印书馆。
- 1944 《中国语法理论》,商务印书馆。
- 张 黎 2003 “界变”论,《汉语学习》第1期。
- 宗守云 2003 “我V了”与“他V了”,《语法研究和探索(十二)》,商务印书馆。
- 井上優 2001 「現代日本語の「タ」」,『「た」の言語学』,つくば言語文化フォーラム。
- 尾上圭介 1982 「現代語のテンスとアスペクト」,『日本語学』1-2,明治書院。
- 木村英樹 2006 「「持続」・「完了」の視点を超えて—北京官話における「実存相」の提案—」,『日本語文法』6-2。
- 金水敏 1998 「いわゆる‘ムード’の「タ」について—状態性との関連性から—」,『東京大学国語研究室創設百周年国語研究論集』,汲古書院。
- 2000 「時の表現」,金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 2 時・否定と取りたて』,

²³ 動詞の結果性については、英語が強く、中国語が弱く、日本語が両者の中間にあるということは、すでに指摘されている。

岩波書店。

国広哲弥 1967 「日英両語のテンスについての一考察」, 『構造的意味論—日英両語対照研究』, 三省堂。

定延利之 2001 「情報のアクセスポイント」, 『月刊言語』, 30—13。

三上章 1953 『現代語法序説—シンタクスの試み—』, くろしお出版。

楊凱榮 2001 「中国語の“了”について」, 『「た」の言語学』, つくば言語文化フォーラム。

Li.C.-N. & S.-A.Thompson. 1981 *Mandarin Chinese : A Functional Reference Grammar* , University of California Press.

Yuen Ren Chao 1968 *A Grammar of Spoken Chinese* , University of California Press (丁邦新译《中国话的文法》商务印书馆 2002年:北京)

【添付資料】

▲ =判断の揺れがある

動詞	具体的な会話例
【あ 行】	
上がる	(状況：試験がよくできた) 今学期の成績は <u>上がった</u> ぞ。
空く	(状況：満席のレストランでずっと待っているとき、帰り支度を始めたお客を見つけて) あっ、あそこのテーブルが <u>空いた</u> よ。
開く	(状況：朝の開店直前に店を訪れて開店の準備が始まったので、少し離れたところで待っていた友人に向かって) お店が <u>開いた</u> よ。
当たる	(状況：競馬で、3番の馬が勝つことに賭けていて、ゴール前でその馬が独走しているのを見て) <u>当たった！当たった！</u>
集まる	(状況：野外ライブコンサートの主催者が好天に恵まれ客の出足が好調なのに気をよくして) 今日だけで <u>2000 人は集まった</u> な。
▲現れる	(状況：記者会見の会場で、カメラの音を聞きつけたレポーターが) 安部総理が <u>現れた</u> ぞ！
頂く	(状況：野球の試合で9回表にホームランが出て3点リードしたチームの監督が) よし、これでこの試合は <u>頂いた</u> ぜ。
▲入れる	(状況：宝探しの冒険物語で、主人公が苦勞してやっと手に入れた宝のありかを示す地図を見ながら) これで宝を手に入 <u>れた</u> ぞ。
浮く	(状況：決算する前に経費節減に努力した課長が) 今期は <u>20 万浮いた</u> な。
受かる	(状況：試験を受けており、十分な手応えを感じている) これで <u>受かった</u> な。
売れる	(状況：新製品の売れ行きが好調なので) 今月だけで千個は <u>売れた</u> な。
上回る	(状況：既往の大会記録を明らかに上回るペースでゴールに迫る選手を見て、コーチが) よし、大会記録を <u>上回った</u> ぞ。
遅れる	(状況：電車が人身事故を起こし、車内の会社員たちが) これで完全に <u>遅れた</u> な。
終わる	(状況1：彼が経済的あるいは身体的に致命的な打撃を受けて) これであいつも、もう <u>終わった</u> な。 (状況2：試験などの出来が芳しくなく) 俺、もう <u>終わった</u> な。
落ちる	(状況：自動車学校の実地試験で運転ミスを冒した人が) あー、また <u>落ちた</u> な。
落とす	(状況：試験で出来が悪かった学生が) これで <u>4 単位落とす</u> たな。
【か 行】	
勝つ	(状況：9回表、6対1で阪神が巨人にリードしているのを見た阪神ファン) これ <u>で勝った</u> な。
枯れる	(状況：旅行前、庭に水を撒くのを忘れていて) しまった。これで庭の花はもう <u>枯れた</u> な。
▲涸れる	(状況：水量が最近減ってきた井戸について) もうこの井戸も <u>涸れた</u> な。
決まる	(状況：サッカーまたは野球の試合を見ている。もう試合は決定的である場合) 勝負はもう <u>決まった</u> な。
合格する	(状況：苦手な数学の出来がよかったので) これなら <u>合格した</u> ぞ。
更新する	(状況：既往の大会記録を明らかに上回るペースでゴールに迫る選手を見て、コーチが) よし、大会記録を <u>更新した</u> ぞ。
【さ 行】	
死ぬ	(状況：毒を飲ませ、相手の苦しんでいる姿を見て) これでお前は、もう <u>死んだ</u> な。
▲承知する	(状況：ベテランの営業マンが顧客との商談でもう一度来週に会う約束を取り付けて) 私の感

	触では、あの人は商品を購入することを承知した <u>ね</u> 。
滑る (=落ちる)	(状況：試験の後、自己採点でかなり出来が悪かった場合) あーあ、こりゃ滑ったな！
知れる	(状況：あまり知られたくないことをおしゃべりの彼女に知られたとわかって) 彼女に知られたということは、これでもう皆にも知れた <u>ね</u> 。
揃う	(状況：群舞で一人うまく踊れない子を指導してその子がやっと上手に踊れるようになったので、演出家が) これで皆が揃った。(もう大丈夫だ。)
【た 行】	
助かる	(状況：試験前、ノートを借りるため、クラスメイトに電話を入れた。そして「ノートを貸してあげるよ」と約束してくれたとき) あっ、助かった！ありがとう。
▲立つ	(状況：初めて立とうとしたわが子を見て、まだ立っていないのに、先走って親が) おっ、立 <u>った</u> ！立 <u>った</u> ！
▲建つ	(状況：大工さんがほぼ完成したマンションを見て) やっと、建 <u>った</u> な。
▲足りる	(状況：あるイベントの資金集めに苦労していたスタッフが、A社が十万円寄付してくれそうだと聞き) これで何とか <u>足り</u> たよ。
▲散る	(状況：どんどん散っていく桜を見ながら) 今年の桜も散 <u>った</u> ね。
捕まえる	(状況：指名手配犯の潜伏先を突き止め、周囲を取り囲んだ警官が) よし、これで(犯人を)捕 <u>ま</u> えたぞ。
着く	(状況：バスの車中から東京ディズニーランドの建物が見えた時点で) さあ、着 <u>い</u> たぞ。
潰れる	(状況：店の経営を放蕩息子が引き継いだと知って) あーあ、あの店もこれで潰 <u>れ</u> たな。
できる	(状況：論文の構想がひらめいたときに) いいアイデアが出た。これで(論文が) <u>でき</u> たぞ。
出る	(状況：よく熊が出没すると言われる森の中をビクビクしながら歩いている時に、ガサガサと音がしたので) <u>出</u> た！ <u>出</u> た！熊が <u>出</u> た！
▲到着する	(状況：バスの車中から東京ディズニーランドの建物が見えた時点で) さあ、 <u>到</u> 着したぞ。
通る (=受かる)	(状況：苦手な数学の試験の出来がよかったので) これで <u>通</u> ったぞ。
解ける	(状況：暗号の解読方法がひらめいて) よし、 <u>解</u> けたぞ。
届く	(状況：あるイベントの資金集めに苦労していたスタッフが、A社が十万円寄付してくれそうだと聞き) これで目標額に <u>届</u> いた <u>ね</u> 。
捕る	(状況：野球で打者が打ったボールが外野へ落ちていくのを見ていた観客が) これは <u>捕</u> ったな。
【な 行】	
流れる (=無くなる)	(状況：激しく降る雨を見ながら) 今夜の(野球の) 試合は <u>流</u> れたな。
無くなる	(状況：激しく降る雨を見ながら) 今夜の(野球の) 試合は <u>無</u> くなったな。
▲抜ける	(状況：瓶の栓を抜くのに悪戦苦闘しているときに、栓が少し緩んだので) よし、 <u>抜</u> けた。
眠る (=死ぬ)	(状況：人に毒を飲ませたが、死んだかどうかは未確認のまま) これであいつも永遠に <u>眠</u> ったな。
残る	(状況：ピアノコンクールに出場した人が予選で会心の出来栄えだったので) よし、これで最終審査に <u>残</u> ったな。
延びる	(状況：激しく降る雨を見ながら) 今夜の(野球の) 試合は明日に <u>延</u> びたな。
伸びる	(状況：新しい人事で敏腕の営業マンが異動してきたので、営業課長が) これで今期の売り上

	げは <u>伸びた</u> な。
乗る	(状況：A社の株が急激に上がる様子を見た投資家が) この勢いなら、今日の相場で一万円の大台に <u>乗った</u> な。
【は 行】	
入る	私の位置からは蹴った瞬間に『こりゃ <u>入った</u> な』とわかるくらい素晴らしいシュートでした。
外す	(状況：サッカーで選手がゴール目掛けてボールを蹴った瞬間に) あっ、 <u>外した</u> 。
外れる	(状況：ボウリングでピンが一本だけ左端に残っており、二投目のボールが右へ転がっているとき) あっ、 <u>外れた</u> 。
▲増える	(状況：新しい人事で敏腕の営業マンが異動してきたので、営業課長が) これで今期の売り上げは <u>増えた</u> な。
太る	(状況：目の前にあるチョコレートに手が伸びているときに) はあー、またこれで <u>太った</u> な。
減る	(状況：新しい人事で敏腕の営業マンが別の課に異動したため、営業課長が) 痛いなー。これで今期の売り上げが <u>減った</u> な。
【ま 行】	
負ける	(状況：9回表、15対1で阪神にリードされているのを見た巨人ファン) ああ、これで <u>負けた</u> な。
▲見つける	(状況：宝探しの冒険物語で主人公が苦勞してやっと手に入れた宝のありかを示す地図を見ながら) これで宝を <u>見つけた</u> ぞ。
もらう	(状況：千載一遇のチャンスが到来して) <u>もらった</u> ！
【や 行】	
焼ける	(状況：家が激しく燃え上がる様を見て) ああ、何もかも <u>焼けた</u> な。
破る	(状況：既往の大会記録を明らかに上回るペースでゴールに迫る選手を見て、コーチが) よし、大会記録を <u>破った</u> ぞ。
敗れる (=負ける)	(状況：ブラジルが4点目のゴールを入れたのを見て) ああ、これで日本はもう <u>敗れた</u> な。